神成

発行：救いの光教団
編集：神成編集室
東京都世田谷区北沢2-22-10
（〒155-0031）
電話 代表03(3413)0123
http://sukui.jp
毎月1回1日発行
購読料 1部80円
（会員の購読料は会費に含む）

2025
No.639
11月号

―真善美―

真が生む　心は善なり善が生む
形は美なり知れよ信徒
真は道　善は行ひ美は心
培はんとて心砕くも
行ひも　心も言葉も美はしき
人こそ天国天人なりける

御光筆『心』

落款　自観書

◎教団方針

信徒よ速やかに目覚めよ、
それは光を受け、邪を捨て、光を授け、
正に生きる事である

◎方針のみちしるべ

（一）みつめなおそう明主様の心
（二）つらぬきとおそう明主様の心
（三）教団綱領を尊び実践する
（四）信仰継承は家族と家庭円満から

神言霊

「美」について【抜粋】

真善美の世界を造るということで、真善はともかく、美と言うと、美術館とか地上天国ということで、これは分かりきった話です。ところがまだ気のつかない美というものがあるのです。美の世界ではないのですが、それはなにかと言うと人間の腹の中です。

浄霊というものは、つまり美にする働きです。汚いものをきれいにするというわけです。いまの世で心のきれいな人間が非常に少ないということは、心でなく肉体が汚いのだから、どうしても浄霊ということによって、一番根本的に本当に結果を得られるというわけです。浄霊は人間を使って個人個人に掃除をしてくれる仕事です。神様はそういう方法をとられたわけです。ところが霊界がだんだん明るくなる、昼間になるということは、人間の霊体の霊身のほうが全体的に浄化されるわけです。そのために、つまりいろいろ病気が起こる。だから神様のほうで全体的に病気が起こるようにすると、人間のほうで…信者がそれを治し、汚いものを除る、出してしまうということで、神と人との共同作業です。ところがその薬毒、血膿というものは非常に多いのです。それは実に想像もつかないくらいなものです。まずその人の一生涯でそれがすっかり除れる人は無いでしょう。ときどき風邪引きとか下痢するとか熱が出るということは、勿論それだけ毒が減りますが、それはわずかなものです。それで浄霊を何十回何百回やるということは、かなり除れます。

人間の美というものも体の中がきれいにならなければ、本当の美ではないということです。やっぱり腹の中が美になれば…肉体が美になれば心も美になりますから、そうすると美しいものを好むということになります。だから美術館などを見る、あるいは見ているうちに趣味が出てくるということは、やはりそういったような汚いものが精神的にそれだけ減ってゆくわけです。つまり魂が美から受けるその作用によって、魂がそれだけきれいになるわけです。非常に必要なことです。神様はそういった、つまり楽しみながら魂をきれいにする、要するに浄化ですが、そういうことをやられるわけです。だからして真善美の美ということの一番の根本は、人間の体の中を美しくするということで、その方法は、つまり直接には浄霊、間接には教えを耳に聞き、それから美を目から入れるということです。本当に地上天国を造る要素なので、他の宗教でそういったような考えでやっているのは、ほとんどないのです。

（御教え集二十九号より抜粋）

レイモン・カルティエ氏夫妻と対談。箱根神山荘にて
昭和27年（1952）6月22日

教団綱領の学び

明主様の教えを心に誓い
光をまくばり救いの業を
普く世にひろめます（全五回）

【第四回】光をまくばり救いの業を普く世にひろめます

主神の啓示により明主様が創成された浄霊法とはいかなるものであるか、その必要性を学ばせて頂きましょう。

『新日本医術・浄霊法』

「世の苦しみを治す手」レイモン・カルティエ氏夫妻との対談に際して撮影されました。

明主様が寝食をもお忘れになる程心血を注がれ、創成なされた新日本医術・浄霊法の研鑽を、一人でも多くの信徒さんと一緒に、いかに浄霊法の社会化を進めていくか。人々の健康づくりに貢献するためにも、社会から受け入れられる浄霊法のあり方を確立することが急務ではないかと思います。「神霊科学」の意味するものは、宗教であって宗教ではない、科学であって科学の領域にとどまらない、その両者を踏まえたもので、これによって人類に真の健康と生命の安全をもたらす二十一世紀の科学であるとお示しになられております。浄霊法は、この「神霊科学」を基にして創成されたものなのです。現実にはこうした明主様の人間観や、病気観に関する『神言霊』も、現代の医学の常識から見て、社会にそのまま受け入れられるもの、また、今の時点では相容れないものと分かれるものと思われます。『今ひとつ重要な点は、浄霊法を修得するには、現代医学に関する最小限の知識を身につけておく必要がある』ということです。

明主様は、医療や薬剤を一切否定されているのではなく、過度な、あるいは容易な投薬、および加療処置は、多くが逆効果となると、厳しく戒められたのです。つまり浄霊により、常に霊体を浄めるならば、医療・医業を必要としないだけの健康を得られるということでございます。

昭和二十五年十月十五日、『本教信徒の中に、浄霊の場合、医師にかかること、薬を飲むこと、注射をすることなどについて、否定するごとき言葉ありやにて、本教の主旨を履き違え、社会の誤解を受けることは、本教を傷つける結果となることは勿論で、この点充分注意され、決して医療を否定するごときことなきよう、ここに重ねて戒意を促す次第である。』と、仰せられております。

（一）明主様の人間観

明主様は〝人間は霊的実在である〟と示されています。また『真理の具現』の神言霊の中では、『神は人間に対し無限の自由を与えている。これが真理である。人間以外の動植物には限られる自由しか与えられていない。ここに人間の尊さがある。然らば人間の自由とはなんであるかと言うと、人間向上すれば神となり、堕落すれば獣となるという両極端のその中間の位置に存在しているからである。』とし、人間は神の使命を果たすための万物の霊長であり、動物や他の生物と根本的に異なる存在であることを明らかにされています。

①　人間の使命【神言霊】

『ここで、今一つの重要事を書かねばならないが、そもそも主神はなぜ宇宙及び人間を作られたかという事であって、恐らくこれ以上重要な根本的問題はあるまいとともに、この事ほど誰もが知りたいと願う事柄もまたあるまい。しかも現在にいたるまで、これについて何人も異論なく、首肯すべき程の説明を与えた者はなかったのであるから、それをここに説いてみるが、本来主神の御目的とはなんであるかというと、それは人間世界をして真善美完き理想世界を造り、これを無限に向上発達せしめるにあるので、これこそ永遠不滅の真理である。したがって今日までの人智では到底想像すら出来得ない程の輝かしい未来をもっているのであるとしたら、人間はこの前途の光明を胸に抱きつつ楽しんで天職使命に尽くすべきである。そういうわけで主神の御目的を遂行すべき役目として造られたのが人間である以上、人間は右の使命を真底から自覚するとともに、生命のあらん限り、その線から離れる事なく働くべきである。それにはなんといっても先ず健康が第一であるべきにもかかわらず、現実は果たしてどうであろうか。誰も知るごとく人間は実に病に犯されやすく健康を損なう場合が余りに多いのが事実である。それがため神は不断に健康を保持されるべく、人体に対し健康擁護の自然作用を与えられているのである。ではその作用とは一体なんであるかと言うと、これが意外にも病気というものなのであるから何人も驚くであろう。それについて十分説明してみるが、まず人間が人間としての役目を果たさんとする場合、どうしても全身に汚穢が溜る。これについても後に詳しく説くが、ともかく汚穢とは霊にあっては曇りであり、肉体にあっては濁血である。ところが人体に汚穢が溜り、ある限度を越えるや、人間活動に支障を及ぼす事になるので、これが除かれるべく前述の如く、自然作用すなわち浄化作用が起るのである。ところがこの浄化作用の過程が苦痛となるため、この苦痛を病気として、悪い意味に解釈したのが現在までの考え方であった。そこで人間一度病気に犯されるや、健康を損ねるものと逆に考えるから、生命の危険をも予想し憂慮するのである。

以上によって考えても分かるごとく、病気なるものは、実に人間の健康を保持せんがための、神の最大なる恩恵である事が判るであろう。従ってこの真理を基本として構成された医学こそ、真の医学と言うべきである。』

秋彼岸の大御祭典が執り行われる

令和七年九月二十一日、秋彼岸を迎えた翌日、秋季大祭・秋のみたままつり併せて敬老長寿祈願、九月感謝祭が東京本部からのライブ配信により各布教拠点とも心を合わせて、大光明・明主様への感謝と祈り、敬老長寿祈願の祭典とともに、厳粛かつ懇ろなる祖霊供養の祭典が滞りなく執り行われました。

会長挨拶要旨

教団では毎年の春秋の彼岸に合わせて神様への感謝をお捧げする祭典と祖霊様の御供養の祭典を併せて執り行っております。

祖霊様は子孫の肩に乗って参拝が許されますので、神様の『おひかり』を頂いていただくためにも祖霊様に一緒に参拝してくださいとご挨拶して出かけるのがよいです。また自宅などで祭典を中継にて参拝される場合でもあらかじめそのようにお伝えさせていただく事も必要かと思います。

明主様は、『霊界はだいたい浄化作用をする所、人間が現界でいろいろと罪をつくって、曇りが霊身に非常に溜まる。あまり曇りのひどいのは人間になれず畜生道へ行く。』と仰っておられます。本日の神歌に

『生き変わり　死に変わりつつ永久の　生命の主は人にぞあるなり』

と賜りました。

生まれ変わりには、再生と転生があります。再生とは人間が人間に生まれる事をいいます。転生とは人間以外のものから人間に生まれる事をいい、動物から人間に生まれ代わるものです。人間は動物のような心、行いをもつと、それ相応に落ちてしまいます。例えばスパイや探偵などは犬、だませば狐というように、獣の苦しみにより罪が許され、人間に生まれます。これを転生といいます。このように、永久に人として生まれ変われるように日々の行いにも気を付けてまいりましょう。

また、祖霊様に飲食をお供えいたしますが、それを私たちが怠ったり、お供えする際にも心がこもっていなかったりすると祖霊様も召し上がる事ができず、やがては、犬や、猫など、動物に憑いて食べ物を漁るようになり、同化してしまい畜生道におちてしまいます。そうならないように日頃から祖霊様へのお食事にも気を付けていただきたいと思います。

本日の祭典に併せて、敬老長寿祈願をさせて頂きました。健康に年を重ねていくには、食事も大切ではないかと思います。日本には季節ごとに旬の食材というものがあります。これをうまく取り入れていく事で自身の体を整えていく事にもつながるのではないでしょうか。この時期でいえば秋の食材がメインになります。これを例えば六割としますと、旬をすぎた夏の食材を二割、これから旬をむかえる、冬の食材をそれぞれ二割という具合で取り入れていくのが理想のようです。ちなみに秋の食材には夏の暑さで消耗した体力を回復させる栄養が豊富に含まれ、冬にむけてエネルギーを体に蓄えたり、からだを温めやすくする働きもあるようなので、そのような事も覚えておくと良いかもしれません。

食事の際には噛むという行為があります。この噛むには「神と結ぶ」という意味があるそうです。食材も神の恵みでもありますので、かみしめながら食事をすることで食への感謝も生まれてくるのではないかと思います。敬老は老いを敬うとも言えますので、大切に年を重ねてまいりましょう。

今月、光守様は誕生日を迎えられます。本日礼拝堂にかけております「大光明如来御尊像」は、明主様が昭和六年の秋にお描きになられたものです。昭和六年といいますと、明主様が六月十五日に天啓を受けられた年でもあり、その年の秋にお描きになられたものであることを思いますと非常に貴重なものであります。また、光守様の生まれ年でもあり、時期を考えますと明主様と光守様との御神縁もなにかしらあるのではないかと思います。

最後に、大光明・明主様の御光が皆様のもとに、ますます降り注ぎますようお祈り申し上げ、光守様に思いをよせつつ御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

本部における秋彼岸の大御祭典の様子

祖霊様（右）、水子様（左）には旬の食材を取り入れた御膳のほか参拝者からのお供え物が捧げられました。

大黒様のおはたらきについて

「火水土の恵み感謝祭」には、『みろく大黒天神様』に教団伊那農場で作られた真心のこもった無施肥無農薬米をお捧げし、明主様の御逸話の嘉例にならい、『金粒米』として、お下げ渡し頂いております。

昔から、私たちの祖先は、現世、および来世において、福寿（一日も早く信徒が心豊かに、生活豊かに福徳のみ恵みが頂かれるよう）を願って、神様を信じ、仏様を尊ぶことを、生活の基本にしてきました。子孫である私たちの願いも、同じであることは申すまでもありません。

七福神（大黒天・恵比寿・毘沙門天・弁財天・福禄寿・寿老人・布袋和尚）を尊崇することも、その表れであり、特に大黒天は、七福神の中でも代表的な神様として、もっとも人々から尊敬され、親しまれている福の神様です。

救いの光教団では、明主様のお示しを頂き、本部に『みろく大黒天神様』を御奉斎し、福寿を日々祈願しております。また各教会をはじめとする各布教拠点においても『みろく大黒天神様』を御奉斎し、祈願祭、感謝祭に御玉串料をお捧げし、金銀財宝招来の祈りを捧げ、日々祈願させて頂いております。

ご家庭におかれましても『千手観音様』と同じく、ひろく御奉斎をお許し頂いて、『みろく大黒天神様』の御力を頂かれ、共々、平安で幸福な生活を営みたいものであります。

東京本部に御奉斎されているみろく大黒天神様

岡田茂吉師の自然農法

教団伊那農場 収穫作業始まる

九月に入り教団伊那農場の稲穂も色づきながら頭を垂れ、稲刈りの時期を迎えました。稲刈りは九月二十七、二十八日の二日間で行われ、収穫した稲を干すハザの組立作業から始まり、バインダーと呼ばれる機械で稲の刈り取りと結束を行い、その稲束を人力でハザにかけて天日干しを行うところまでの一連の作業が行われました。人手が必要な作業のため、作業奉仕の呼びかけを行ったところ、東京教会信徒を中心に九名の方が参加されました。参加者の中には農業に興味関心のある若手信徒や未信徒のほか稲刈り体験は初めてという方もおりましたが、自然農法担当者が作業方法を教えると直ぐに覚えて、コツが必要なハザかけなど一連の作業を難なくこなしておりました。当日は天気も良く、人数の多さも相まって和気あいあいとした雰囲気の中で順調に作業が行われ、昼食時には地元の伊那教会信徒の皆さんによる手作り弁当などが用意され、その美味しさに皆さんも大変満足しておりました。

しかし、地道で体力のいる作業の為か終盤には参加者の顔に疲れが見えたものの、三枚の水田全ての稲刈りが完了し、最後の雨よけのシート掛けまで終えると参加者には達成感と喜びが満ち溢れていました。

収穫作業はこれで終わりではなく、ハザの天日干しが終わると脱穀作業に入り、その段階で初めて今年の収穫量が分かります。

最後に、大光明・明主様の御守護のもと、一番の山場の作業が無事に終えられた事に感謝を申し上げますとともに、作業に関わっていただいた全ての方に感謝申し上げます。

（左）無施肥無農薬栽培の伊那水田、（右）一般農法の水田
※伊那水田では稲が倒れず真っすぐ生長しているのが分かります。

稲刈り作業全体の様子
稲束運び（左）とハザ掛け（右）は連携作業でスムーズに行われました。

ハザの組立の様子

最後の作業となった雨よけのシート掛け

バインダーによる稲刈りの様子

作業を終えて笑顔で記念撮影

十二月本部祭典のご案内

◎慰霊祭　令和七年十二月十日（水）十時　（ライブ配信あり）
◎御聖誕祭・大感謝　令和七年十二月二十一日（日）十時
（ライブ配信あり 布教拠点一斉）
◎感謝納めの参拝　令和七年十二月三十一日（水）十時
◎哀悼慰霊祭　令和七年十二月三十一日（水）
感謝納めの参拝に続き

松茸と栗（明主様筆）　昭和五年頃

VEGETABLE OIL INK　植物油インキを使用しています。